

233

動物用高解像力ポジトロンCTの
システム設計

富谷武浩, 野原功全, 村山秀雄, 山本幹男,
田中栄一 (放医研 物理)
林達郎 (浜松ホトニクス)

ポジトロンCTの高解像力化が望まれているが、別報の光電子増倍管(PMT)の採用により、検出器小型化の見通しを得て、動物実験用の小型装置の開発に着手したので、その基本システム設計につき報告する。検出器部は、4mm幅、10mm高さ、20mm厚さのゲルマニウム酸ビスマズ蛍光体128個より成り、直径265mmの円環上にPositology(定角回転により、全体として均一性の良いサンプリング分布を得るように検出器配列を決める方法)に基づき配置する。回転は360°の往復運動とし、回転部からの信号伝送は同軸ケーブルにより行う。構成は、2個の蛍光体を1本のPMTに結合し、PMT8本を1群とし、1群と対向する5群と同時計数をとる。システムの性能の設計値は、検出器対分解能は中心で2mm半値幅、長さ55mmのコリメーターを使用したときの一様水溶液ファントムに対する検出感度は、 $1.2 \text{ kcps} / \mu\text{Ci} / \text{ml}$ 、有効視野は128mmである。

234

HEADTOME IIIの基本的性能

菅野巖、三浦修一、村上松太郎、高橋和弘、
穴戸文男、上村和夫 (秋田脳研 放)

HEADTOME IIIは高感度、高性能な頭部用ポジトロンエミッショントモグラフィ(PET)として設計された。13.4×25×40mmのBGOの結晶を480個を直径75cmのリングに3層配置している。検出器リングの内側には測定目的に応じて、高分解能と高感度、狭視野と広視野用のコリメータが設置できる。

分解能はシャドウマスクなし(高感度用)で視野中心部が半値巾8.5mm、中心から10cmが9.0mm、20cmが9.5mmであった。シャドウマスク付き(高分解能用)は視野中心部で6.5mmであったが中心から10cmでは9.0mmでその効果がほぼ視野中心部に限定されることが確認された。スライス厚はリング間セプタのない通常のコリメータではリング内スライスで、視野中心が半値巾14mm、中心から10cmが16mmであった。リング間スライスでは、中心部が12mm、中心から10cmが18mmであった。また、リング間セプタ付のコリメータでは、視野20cm以内で12mmであった。感度は設計時の計算では $50 \text{ Kcps} / \mu\text{Ci} / \text{ml}$ を予想したが、実測値は $43 \text{ Kcps} / \mu\text{Ci} / \text{ml}$ であった。以上、HEADTOME IIIの初期の基本的性能およびその定量性についての評価も検討して報告する。

235

全身用ポジトロンCT装置の開発

井上慎一、石松健二、大串 明、平田 淑、
熊本三矢(日立メディコ)、高見勝己(日立中研)、
林 達郎(浜松ホトニクス)、鳥塚完爾、
森田陸司(京大病院 放核)

すでに開発した全身用ポジトロンCT第1次試作機に続いて全身用ポジトロンCT第2次試作機を開発した。本装置はリング当り192個のBGOシンチレータ(12×24×24mm)と96本の角型ツイン方式の光電子増倍管を円周上に不均等間隔、密接配列した4層の検出器リングを備え、7スライスの同時計測が可能である。今回、本装置によるファントム実験の物理的データを報告する。

尚、本開発は通産省工業技術院医療福祉組合委託研究開発制度にもとづく委託研究によって行われた。

236

高解像力ポジトロンECT装置用BGO検出器ユニット

村山秀雄, 田中栄一, 野原功全, 富谷武浩,
山本幹男 (放医研 物理), 林達郎 (浜松ホトニクス)

高解像力ポジトロンECT装置の消滅ガンマ線検出器ユニットとして、2つのBGO結晶と1本のグリッド付光電子増倍管から成る2結晶BGO検出器を考案した。各BGO結晶(幅4mm、高さ10mm、奥行20mm)は、それぞれ両側に鉛セプタ(幅1mm)を挿入してから重ね合わせる。光電子増倍管は角形(13mm×13mm)で、光電面後方の片側にのみグリッドが追加されている。BGO結晶は一方のみがグリッド付光電面上に光学結合されるが、グリッドを適当な正電位に保てば、どちらの結晶でガンマ線が吸収されても、光電子増倍管のアノード信号に大きな差異はない。しかし、-10V程度の負電圧パルスをグリッドに印加すれば、アノード信号の波形はガンマ線を吸収した結晶により大きく変化する。このアノード信号を波形弁別回路で処理することにより、2結晶の弁別に成功した。以上の検出器ユニットの位置弁別特性と時間特性について報告する。